

特定非営利活動法人



サンカクレベル 総括レポート

2023年12月



目次

1. サンカクシャの概要
2. サンカクレベルの開発と概要
3. サンカクレベルの実施報告
4. サンカクレベルからの学び
5. 今後へ向けて

※本「総括レポート」は、**若者の状態を可視化する指標**である「サンカクレベル」を総括し、報告するために作成しました。
サンカクシャでは、2021年7月にサンカクレベルを開発し、2023年12月までの3年間に、合計6回の計測を行いました。



1. サンカクシャの概要





若者が安心して生き抜いていける社会をつくる

名称 特定非営利活動法人サンカクシャ

設立 2019年5月24日

所在地 東京都豊島区上池袋4-35-12

代表者 代表理事 荒井佑介

活動内容 親を頼れない若者のための居場所作り、
仕事、住まいのサポートを250名（実
数）の若者に提供

従業員 24名（業務委託含む）

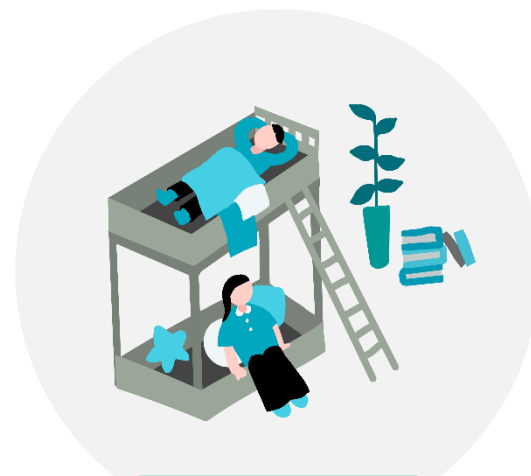
予算規模 6,200万円 22年度



居場所



仕事



住まい

若者の孤立

親や身近な大人を頼れない若者の特徴



暴力

社会的養護

相談できる人がいない

無関心

親に余裕がない

家に居場所がない



親がそもそもいない / いても頼ることができない



何かに取り組む意欲がなくなる



人と関わるのが怖くなる

支援が届きにくくなり、孤立しやすい

活動概要

虐待などの影響により「家に居場所がない」

15歳から25歳くらいまで若者を4つの事業でサポート

居場所1拠点、住まい26部屋、連携機関数約50機関、雇用連携企業30社で

計250名の若者に寄り添っている



アウトリーチ事業

若者とつながる方法を開発



居場所事業

安心できる居場所づくり



社会サンカク事業

働く体験の機会提供



居住支援事業

住まいのサポート



2. サンカクレベルの開発と概要



サンカクレベル開発の背景

■抱えていた課題（2021年3月頃）

- 若者が変化しているのは分かるが、どのような変化なのか言語化できていない
- 代表の荒井だけでなく、スタッフ全員が若者の変化を捉えていくことが必要。若者がステップを刻んで前進していることや、どのプログラムに参加すると良いかを、各スタッフが判断できるようにしたい
- 新しいスタッフやオトナリサンへ、若者に育みたい変化を伝えて一緒に取り組みたい
- サンカクシャが目指していることや活動の価値を、団体の外へもっと伝えたい



若者の状態を表す「サンカクレベル」の開発へ

■サンカクレベルの目的

- サンカクシャが大切にしたい若者の変化を、言語化する
- スタッフが若者の状態を把握し、プログラムへの参加を判断する材料にする
- 新しいスタッフやオトナリサンが、サンカクシャが大切にしたい変化を掴みやすくなる
- サンカクシャの活動の価値を対外的に伝える

■ サンカクレベル開発の流れ

■ 開発の方針

- ルーブリック型の指標を開発する
- 運用を含めて検討する

■ サンカクレベルの位置づけ

- 若者の状態を定期的に確認する
- 若者の変化をスタッフが共有し、適切なプログラムへの参加を促す
- プログラムによって生じた変化を、成果として報告する

■ 開発体制

- サンカクシャ：荒井、石塚
- 指標開発：DataCast池田氏
- 全体調整：土岐

■ 開発期間

開発：2021年4月～7月

1回目：2021年8月～9月、以降は運用へ

■ 開発スケジュール（2021年）

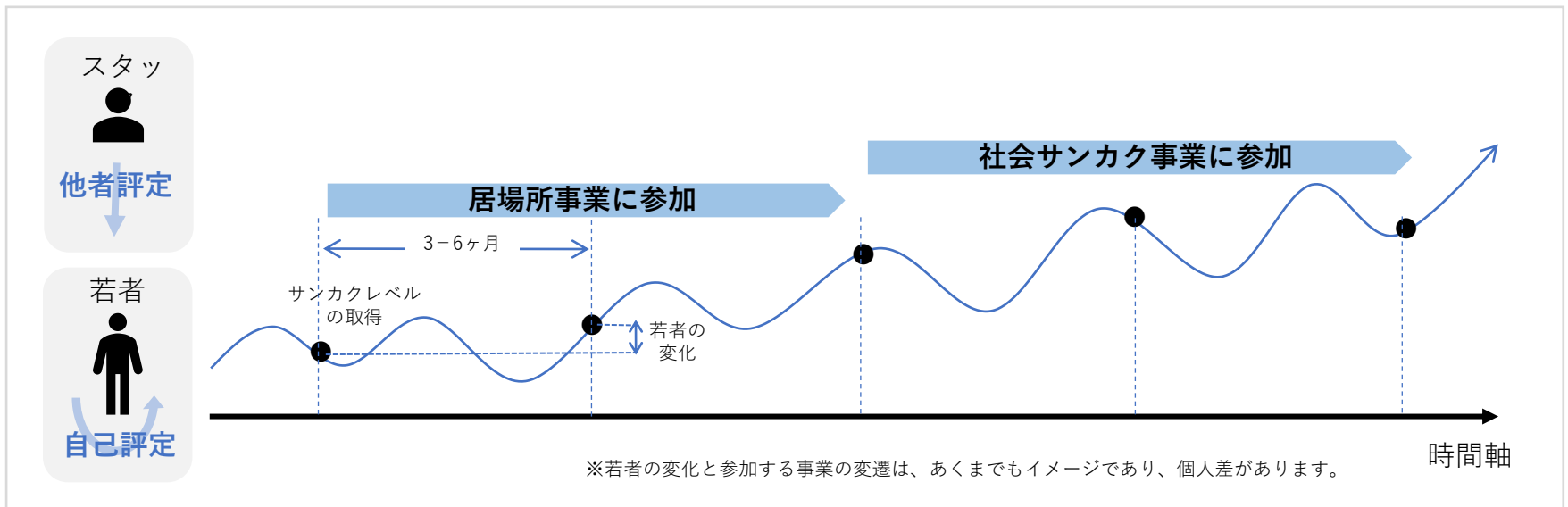
年月	実施内容
4月	・サンカクシャの各事業の内容を整理 ・居場所の指標などの先行事例の調査
5月	・サンカクシャのミッションと各事業のつながりを整理 ・サンカクレベルの元となる「望んでいる若者の変化」を言語化
6月	・ミッションと事業を、サンカクシャの全体図として整理 ・「若者の変化」をルーブリックの指標として構成し、サンカクレベルたたき台の作成
7月	・サンカクレベルたたき台をスタッフに試してもらい、意見交換 ・サンカクレベルの完成
8月	・スタッフと若者に、第1回目サンカクレベルのアンケートに回答してもらい、データを収集
9月	・池田氏によるデータ分析 ・分析レポートをもとに、結果を確認
10月	・スタッフと共に、サンカクレベルの結果共有会を開催

サンカクレベル概要

■項目および運用

- ループリック評価項目は、《自己認識》7項目、《他者との関係性》8項目からなる
- スタッフによる「他者評定」と、若者自身による「自己評定」を同じタイミングで行う
- 定期的（3-6ヶ月に1度）、データを収集する
- 若者各人の「その時における状態」と「前回からの変化」をみる

大項目	小項目
《自己認識》 自己理解・自己承認・自信 「自分は生きてていい」	<ul style="list-style-type: none"> 自己受容 有用感・役割感 安心感 成功体験 観察学習 自己効力感 失敗への体制
《他者との関係性》 人とのつながり 「誰かと居て大丈夫」	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション 自己開示 被受容感 ありのままの自分 他者とのつながり 他者受容 表現力 読解力



サンカクレベル 《自己認識》 内容

- 《自己認識》の概念を、7項目に整理
- レベル1～4を設定し、文章で記述
- 「他者評定版」と「自己評定版」を準備

概念名	ちょっと難しい... LEVEL 1	もっと頑張りたい LEVEL 2	まあできる LEVEL 3	自信あり！ LEVEL 4	参考文献
自己受容	彼（彼女）は、自分自身に関心がなく、自分の短所や欠点に向き合おうとしていない	彼（彼女）は、自分の短所や欠点を把握しているが、それを強く気にして自己否定に陥っている	彼（彼女）は、自分の短所や欠点を把握して、自己否定から抜け出して何とかしようと日々もがいている	彼（彼女）は、自分の短所や欠点を理解しており、それらを自分の一部だと認めて受容し、気兼ねなくすごしている	宮沢（1987, 1998）
有用感・役割感	彼（彼女）は、サンカクシャの中での立ち位置や振る舞い方を見だせず、輪に入ることができない	彼（彼女）は、サンカクシャの中で自分らしく振る舞っているが、輪に入ることができない	彼（彼女）は、サンカクシャの中で自分らしく振る舞っており、輪に入ることができている	彼（彼女）は、ムードメーカーやリーダーなど、サンカクシャの中で役割を担っており、周囲から頼られ必要とされる存在となっている	則定（2008）の役割感因子
安心感	彼（彼女）は、いつもそわそわとしていて落ち着きがない	彼（彼女）は、ひとりであるときはくつろいでいるが、誰かがいるときはそわそわして落ち着きがない	彼（彼女）は、知っている人といるときは安心してくつろいでいるが、それ以外の人といるときはそわそわして落ち着きがない	彼（彼女）は、誰が同じ空間にいても安心してくつろいでいる	チャレンジングスクール生における地域の居場所感尺度（斎藤, 2007）
成功体験	彼（彼女）は、自分にやれそうなことがあっても、まったく挑戦しようとならない	彼（彼女）は、自分にやれそうなことをやってみているが、失敗が多く自信を失っている	彼（彼女）は、自分にやれそうなことに挑戦し始めており、多少の失敗もあるが、少しずつ成功体験を重ねている	彼（彼女）は、自分がやれることにどんどん挑戦し、多くの成功体験を重ねている	Bandura(1977)の成功体験
観察学習	彼（彼女）は周囲の頑張っている人を眺めることがない	彼（彼女）は、周囲の頑張っている人を眺めることがある	彼（彼女）は、周囲の頑張っている人を眺めて、その人から何らかの刺激や影響を受けることがある	彼（彼女）は、周囲の頑張っている人を眺めて、その人から何らかの刺激や影響を受けることにより、その人の考え方や行動を積極的に真似することがある	Bandura(1977)の観察学習
自己効力感	彼（彼女）は、自分に自信がなく、新たな取り組みへの参加に抵抗感を示している	彼（彼女）は、自分に自信がないものの、誰かが活動を始めたならそれに合わせる形で新たな取り組みに参加している	彼（彼女）は、自分に自信をもち、誰かが活動を始めたなら自ら積極的に協力するような形で新たな取り組みに参加している	彼（彼女）は、自分に自信をもち、自ら率先して積極的に新しい取り組みに参加している	General Self-Efficacy Scale（Schwartz & Jerusalem, 1995）
失敗への耐性	彼（彼女）は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直るのに時間がかかる	彼（彼女）は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直ることができるが、困難の原因を考えることがあまりない	彼（彼女）は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直ることができ、困難の原因を考える	彼（彼女）は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直ることができ、困難の原因を分析したうえで改善につなげようと努力を始める	レジリエンス尺度（石毛・無藤, 2005）の「自己志向性」因子

サンカクレベル 《他者との関係性》 内容

- 《他者との関係性》の概念を、8項目に整理
- レベル1～5を設定し、文章で記述
- 「他者評定版」と「自己評定版」を準備

概念名	ちょっと難しい... LEVEL 1	信頼できる人 に対してであればできる LEVEL 2	内側の人 に対してであればできる LEVEL 3	外の大人のほかに 内側の人が一緒に いれればできる LEVEL 4	外の大人のみ に対してであってもできる LEVEL 5	参考文献
コミュニケーション	彼(彼女)は、周囲の人とうまく会話ができない	彼(彼女)は、支援者となら会話ができる	彼(彼女)は、身内となら会話ができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人と会話ができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人と気軽に会話ができる	大学生によるコミュニケーション能力自己評価尺度(町田,2018)の「社交性」因子
自己開示	彼(彼女)は、周囲の人々に対して自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話さない	彼(彼女)は、支援者には自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	彼(彼女)は、身内には自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人に対して自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人に対して自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	レジリエンス尺度(石毛・熊藤,2005)の「関係志向性」因子
被受容感	彼(彼女)は、自分の存在が誰かに受け入れられていると感じられていない	彼(彼女)は、支援者には自分の存在が受け入れられていると感じられている	彼(彼女)は、身内には自分の存在が受け入れられていると感じられている	彼(彼女)は、支援者のフォローがあれば、外の大人に自分の存在が受け入れられていると感じられている	彼(彼女)は、支援者のフォローがなくとも、外の大人に自分の存在が受け入れられていると感じられている	居場所の心理的機能を測定する尺度(杉本・庄司,2006)の「被受容感」因子
ありのままの自分	彼(彼女)は、リラックスして自分らしく振る舞ったり、素の自分で話すことができない	彼(彼女)は、支援者の前であれば、リラックスして自分らしく振る舞ったり、素の自分で話すことができる	彼(彼女)は、身内の前であれば、リラックスして自分らしく振る舞ったり、素の自分で話すことができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人の前で、リラックスして自分らしく振る舞ったり、素の自分で話すことができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人の前で、リラックスして自分らしく振る舞ったり、素の自分で話すことができる	居場所の心理的機能を測定する尺度(則定,2008)の「本来感」因子 本来的性目録(三輪・名取・林,2017)
他者とのつながり	彼(彼女)は、困った時に相談したり深い話をする事ができるような相手がいらない	彼(彼女)は、支援者に対してであれば困った時に相談したり深い話をする	彼(彼女)は、身内に対してであれば困った時に相談したり深い話をする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人に対して困った時に相談したり深い話をする	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人に対して困った時に相談したり深い話をする	レジリエンス尺度(石毛・熊藤,2005)の「関係志向性」因子
他者受容	彼(彼女)は、相手の意見に共感したり、相手の意見を受け入れたりしない	彼(彼女)は、相手が支援者であれば、意見に共感したり、意見を受け入れたりする	彼(彼女)は、相手が身内であれば、意見に共感したり、意見を受け入れたりする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人の見解に共感したり、意見を受け入れたりする	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人の見解に共感したり、意見を受け入れたりする	ENDCOREs(藤本・大坊,2007)の他者受容
表現力	彼(彼女)は、自分の考えを伝える際、相手がわかりやすいように情報を伝えようとししない	彼(彼女)は、支援者に対してであれば、自分の考えを相手にわかりやすく伝えようとする	彼(彼女)は、身内に対してであれば、自分の考えを相手に伝えようとする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人に対して自分の考えを相手に伝えようとしている	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人に自分の考えを伝えようとしている	ENDCOREs(藤本・大坊,2007)の表現力
解読力	彼(彼女)は、相手が誰であっても、言っていることに耳を傾けて理解しようとししない	彼(彼女)は、相手が信頼できる人であれば、その相手の言っていることに耳を傾け、理解しようとする	彼(彼女)は、相手が身内であれば、その相手の言っていることに耳を傾け、理解しようとする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人の方の言っていることに耳を傾け、理解しようとする	彼(彼女)は、支援者がそばにいても、外の大人の方の言っていることに耳を傾け、理解しようとする	ENDCOREs(藤本・大坊,2007)の解読力

サンカクレベルの留意点

サンカクレベルの開発と並行して、運用における留意点を話し合い、団体内で共有しました。

■ 指標との付き合い方

- 指標を意識することなく、目の前の若者に向き合う。普段は忘れていてOK。
- 指標とは、**若者の評価や成績スコアではない**。スコアを上げることが目標ではない。
- 指標だけを見て判断しない。他の若者と**比較しない**。**優劣をつけない**。その若者の過去スコアを見るのは良いが、今の状態に向き合う。**若者を見て、意向を尊重する**。
- 指標を**一つの参考情報**として、若者一人ひとりを振り返り、**変化を分かち合うきっかけ**として使う。定期的に指標をチェックして振り返り、スタッフ同士で若者の変化を共有する機会をつくる。

■ ベースとなる姿勢

- スタッフやオトナリサンが、若者に対して**自然な状態で接する**ことが大切。
- マニュアルや指標に沿うのではなく、若者に何かしようとするのではなく、自然に関り、寄り添っていく。**若者とスタッフが人同士として一緒にいる**。
- ケース会議では「どう対応するか」ではなく、その若者について語り、スタッフみんなが若者の変化や成長を噛みしめられると良い。

（参考）ルーブリック

■ルーブリックとは

- 教育などの分野で用いられる評価手法の一種
- 学習者の理解度やスキルの到達度を、定性情報を用いて測ることができる
- 複数の項目について、具体的な評価基準に沿ってレベルを判定するため、ばらつきが減る
- 項目には、その学習によって習得してもらいたい観点が示され、目標が明確になる

例：ルーブリック（DataCast池田氏資料に加筆）

ルーブリックの作成の手続き②：質問項目の作成
各概念の観察可能な行動を、設定した段階ごとに分割する。

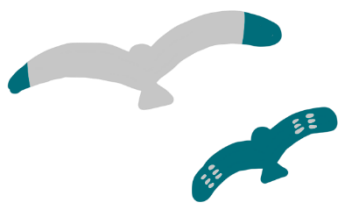
理解度・到達度・レベル

→

概念名	ちょっと難しい... (1点)	もっと頑張りたい (2点)	まあできる (3点)	自信あり! (4点)
項目 ソーシャル スキル	自分の意見や相手の意見を自分の中でうまく整理できず、意見を発現できていない	自分が言いたいことは整理できるが相手の考えがうまくつかみ取れず、自分の意見を発言できない	自分の考えや相手の意見を上手に整理して理解できているが、自分の意見を相手にいうことはできていない	相手の考えていることを把握して調整したうえで自分の考えを上手に整理して、自分の意見を述べられている
	(A)×, (B)×, (C)×	(A)×, (B)×, (C)○	(A)×, (B)○, (C)○	(A)○, (B)○, (C)○

(A): 自分の考えをうまく整理できる (架空の尺度項目、以下同様)
(B): 相手の発言から考えていることが理解可能
(C): 自分の考えを発言できる

Note: たとえば、ソーシャルスキルという概念を測定した場合、ABCの三つの項目を先行研究から拾ってきたと仮定します。その後、ABCがいずれも満たされていると判断できる場合は「自信あり」の最高得点である4点を、三つのうち二つできる場合は「まあできる」の3点、三つのうち一つだけできる場合は「もっと頑張りたい」の2点、いずれもできない場合は「ちょっと難しい」の1点という数字を算出して統計分析をおこないます。



3. サンカクレベルの実施報告



■ サンカクレベルの実施

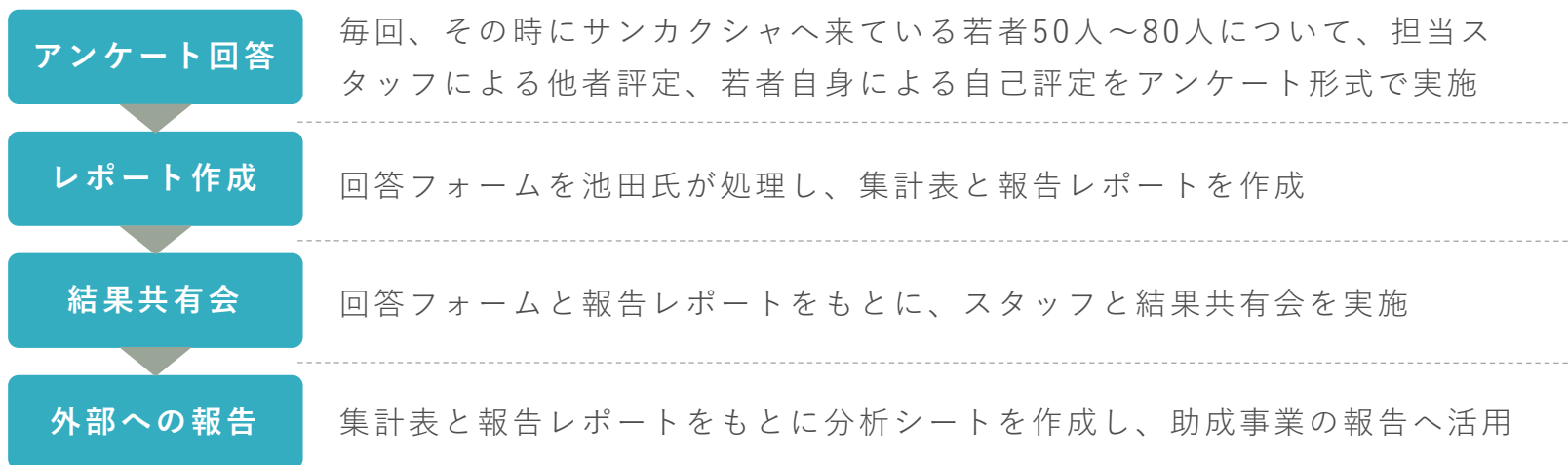
■ 実施状況

3年間に合計6回、サンカクレベルのデータ収集を行いました。



当初は、年4回（3ヶ月に1回）を想定していたが、1回の実施に約2～3ヵ月間を要することから、4回目以降は6ヵ月に1回程度の実施へ

■ 各回の実施の流れ



サンカクレベル1回目の結果

1回目のデータ分析では、主にサンカクレベルの有用性を検証しました。

また、居場所事業と社会サンカク事業の若者の状態の違いを確認することができました。

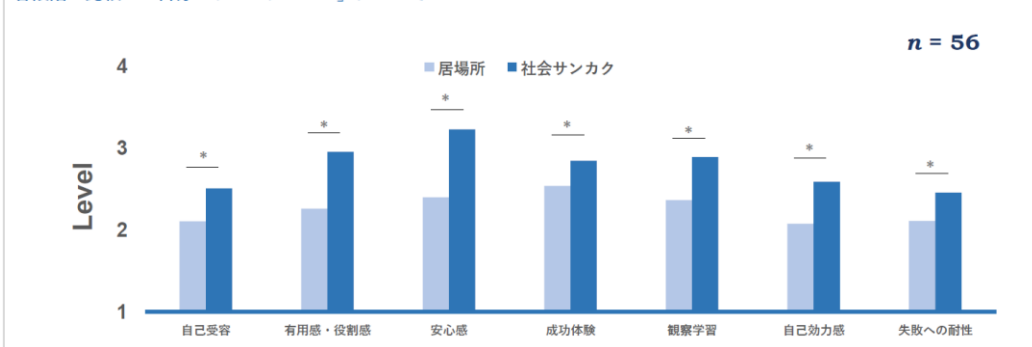
【実施概要】

- 実施期間：2021年8月
- 他者評定として、スタッフ5名が、若者56名について回答した。若者55名の内、37名は居場所事業、19名は社会サンカク事業に参加している。
- 自己評定は、社会サンカク事業の若者19名のみが回答した。

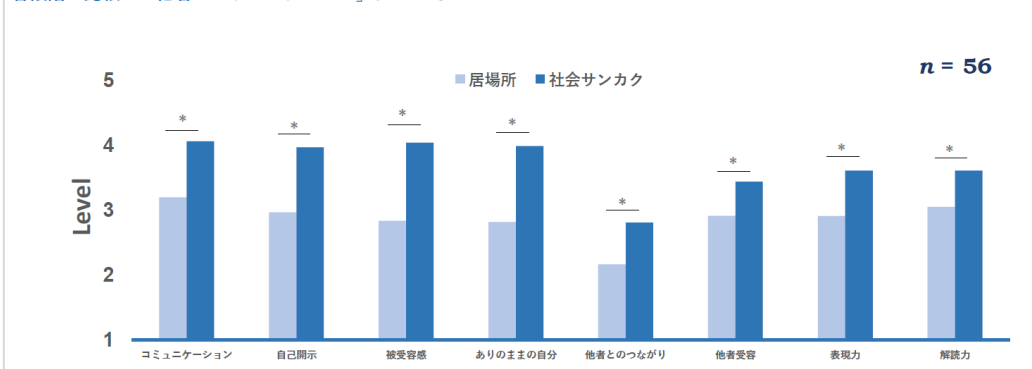
【結果サマリ】

- 他者評定において、1人の若者に対するスタッフのスコアは概ね一致している。そのため今後は、ある若者についてスタッフ1名が回答することとした。
- スタッフによる他者評定と若者による自己評定では、有意な関連性が見られなかった。継続して確認していく。
- 居場所事業の若者と社会サンカク事業の若者の評定値に差が見られた（右図）。プログラムの違いがデータに表れたと考えられる。

各段階の比較：「自分のサンカクレベル」について



各段階の比較：「他者とのサンカクレベル」について



図：他者評定の結果

サンカクレベル2回目の結果

2回目では、直近3ヶ月間における若者の変化を確認することができました。有意に変化していることが確認できましたが、短期間のため引き続き検証を続けます。

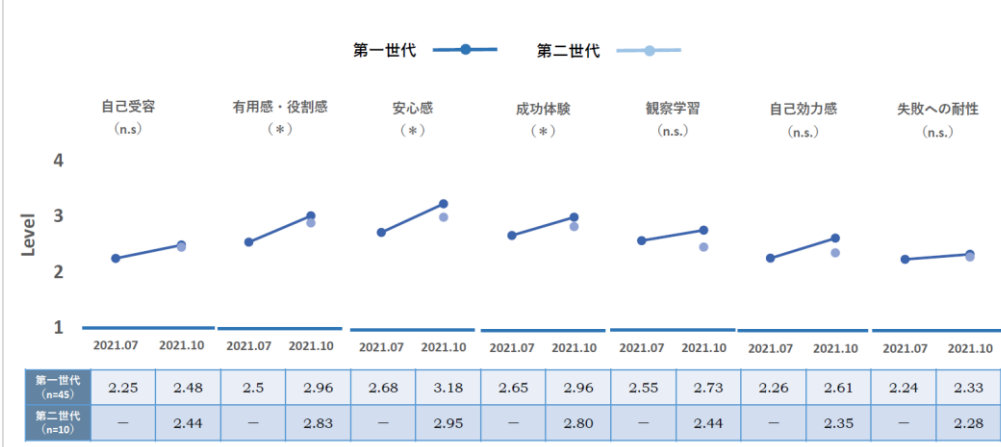
【実施概要】

- 実施期間：2021年11月
- 他者評定として、スタッフ5名が、若者55名について回答した。内45名は8月にも回答していることから、3ヶ月間の変化が確認できた。
- 自己評定は、社会サンカク事業の若者20名のみが回答した。

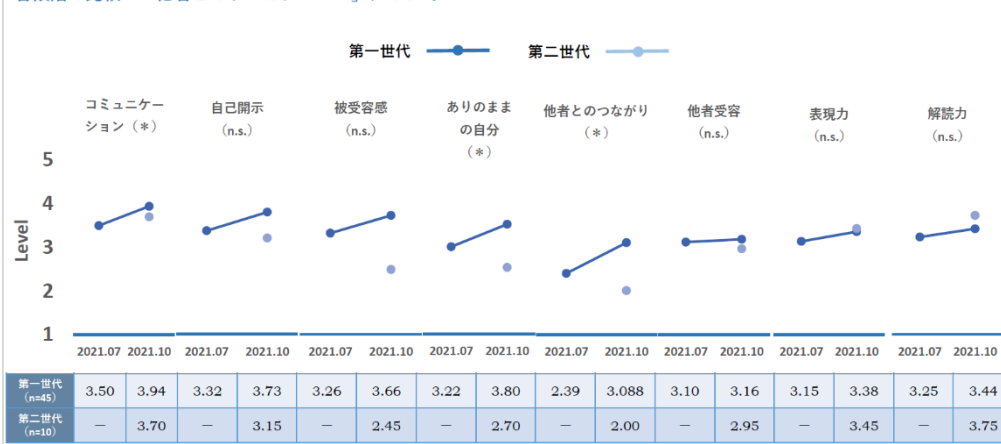
【結果サマリ】

- グラフを見ると多くの小項目で3カ月前よりも評定値が向上している。特に6つの小項目については有意に向上している（*の付いている項目）。サンカクシャの活動によって若者が良い方向へ変化したことが確認できた。
- スタッフによる他者評定と若者による自己評定では、一部に相関性が見られたが有意な差は認められなかった。継続して確認していく。

各段階の比較：「自分のサンカクレベル」について



各段階の比較：「他者とのサンカクレベル」について



サンカクレベル3回目の結果

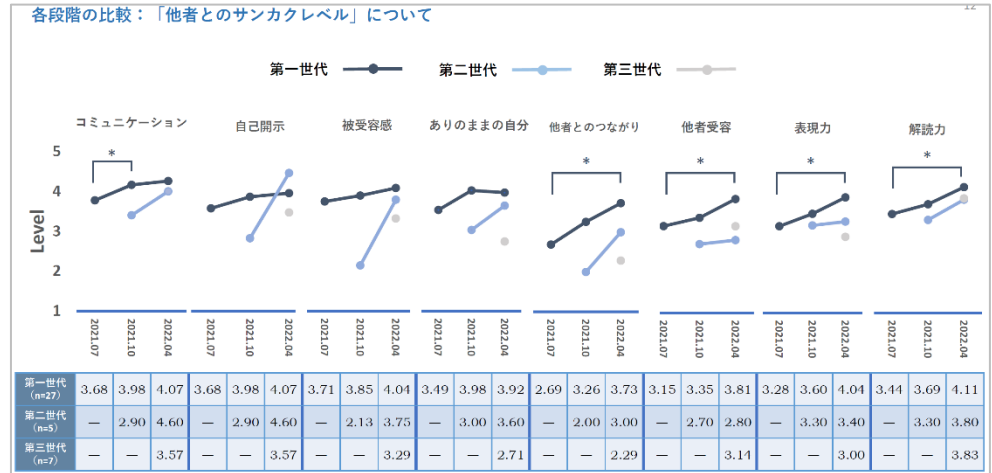
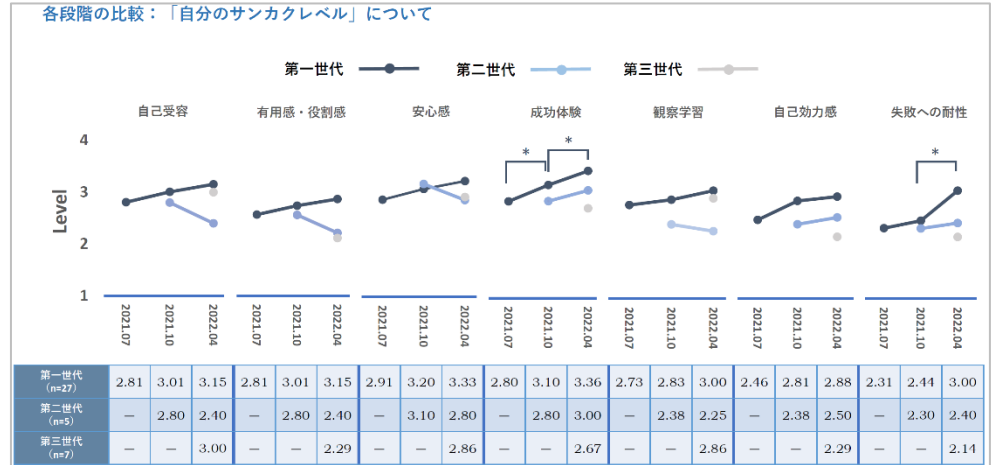
3回目では、若者の8ヶ月間の変化を確認することができました。概ね上昇傾向にあり、有意に上昇している項目もあることから、活動の有用性が検証できました。

【実施概要】

- 実施期間：2022年4月
- 他者評定として、スタッフ7名が、若者39名について回答した。内27名は昨年7月、5名は昨年11月にも回答していることから、8ヶ月間における変化を確認した。
- 自己評定は、社会サンカク事業の若者30名が回答した。

【結果サマリ】

- 昨年7月から回答している第一世代については、ほぼ全ての項目で上昇の傾向がみられた。昨年11月から回答している第二世代については、4つの項目で低下がみられたが、残り11項目では向上していることが明らかとなった。これらの結果から、サンカクシャの活動によって若者が良い方向へ変化したことが確認できた。



図：他者評定の結果

サンカクレベル4回目の結果

4回目では、1年を越えて若者の変化を確認することができました。

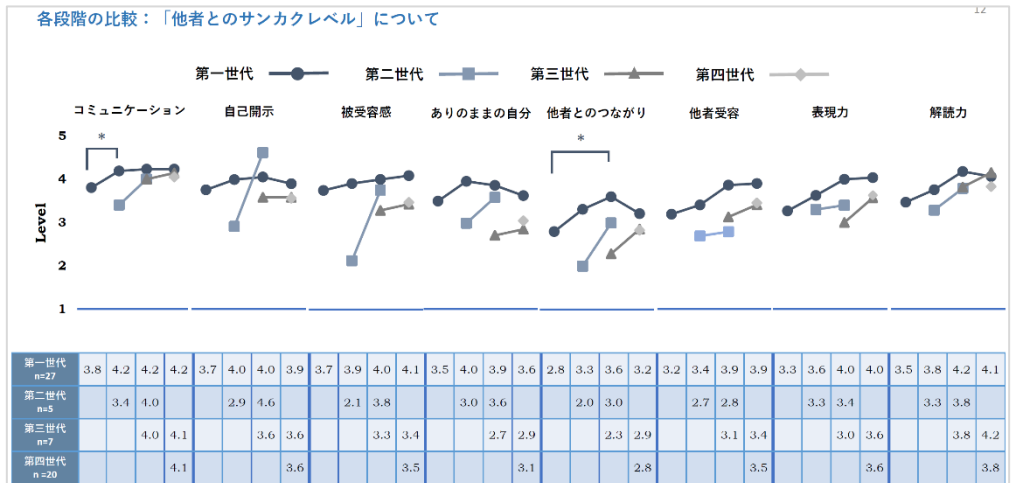
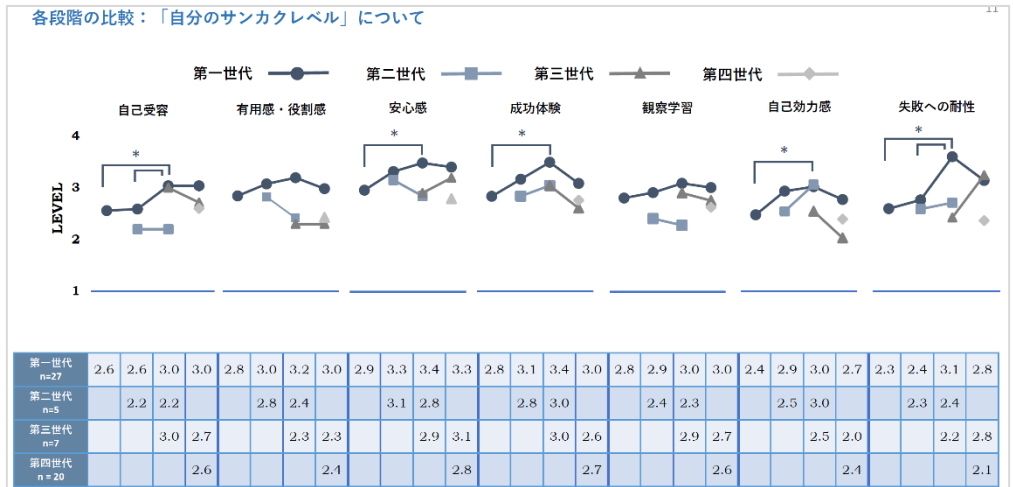
スコアが下がる傾向が認められ、特に数名のスコアの低下が全体へ影響を与えています。

【実施概要】

- 実施期間：2022年8-9月
- 他者評定として、スタッフ7名が、若者59名について回答した。内27名は昨年7月から回答を続けている。新規の若者が増えていることから、今回初めて回答する若者は20名となった。
- 自己評定は、若者35名が回答した。

【結果サマリ】

- 第一世代において、前回3回目の結果を下回る項目が多く生じている。27名のうち、数名のスコアが大きく下がっており、数名のスコアはあまり変化していないことが背景にある。
- 第三世代の「他者との関係性」について全体的な上昇が見られ、周囲との関りが向上している。
- 一般的にスコアが4を超えるとそれ以上の上昇が見込めない頭打ちの状態になると考えられ、今後は4以上を保っているかどうかを見ていく。



サンカクレベル5回目の結果

5回目頃から、データの読み解きに難しさを感じることも増えています。

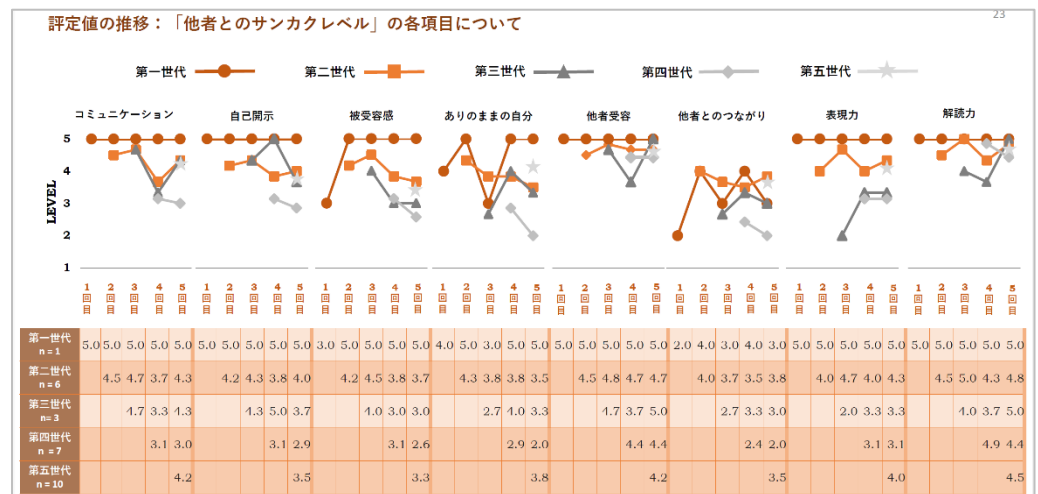
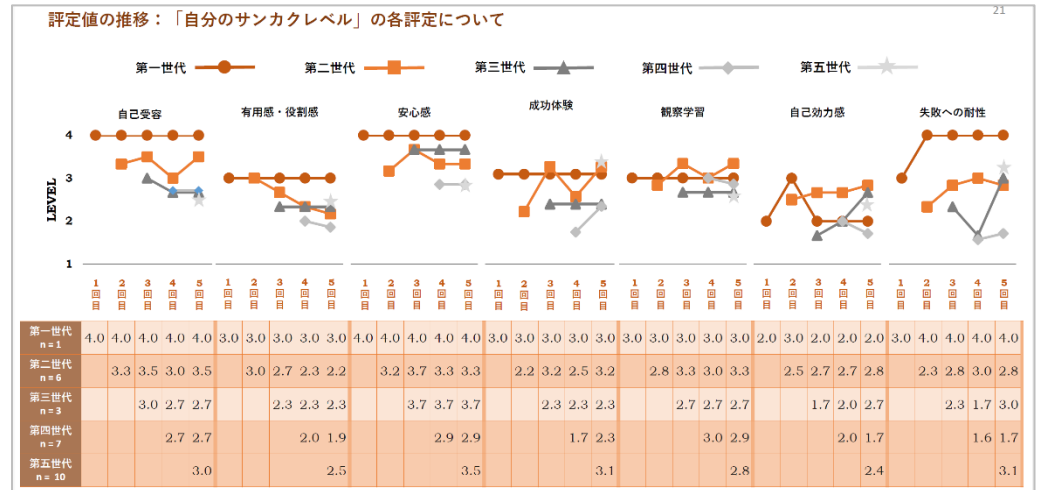
自己評価は1回目から高止まりの傾向が強く、項目やレベル感の調整が必要となっています。

【実施概要】

- 実施期間：2023年2月
- 他者評価として、スタッフ6名が、若者42名について回答した。第一世代16名、第二世代1名、第三世代3名、第四世代11名、今回初めて回答する第五世代11名である。
- 自己評価は、若者27名が回答した。

【結果サマリ】（自己評価）

- 他者評価において、第一世代は山なりの形状となり、ゆっくりと下降気味の状態が続いている。最近数名の若者が悩みに直面しており、全体のスコアへ影響している。
- 右図の自己評価は、1回目から高止まりの傾向が強く、変化が読み取りにくい。1-3回目は社会サンカク事業の若者のみが回答したことから、このような傾向にあると考えられる。第四世代、第五世代は居場所事業の若者を含んでいることから、スコアが低めとなっている。



サンカクレベル6回目の結果

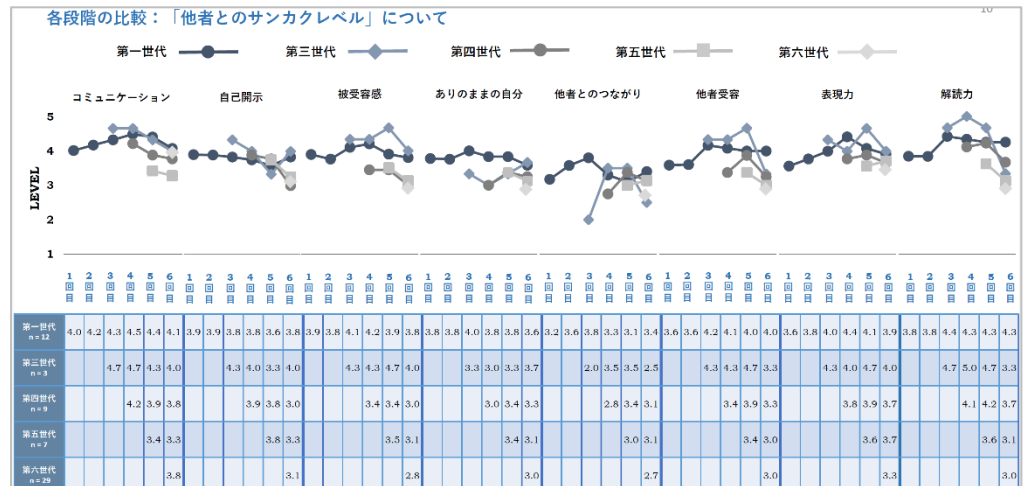
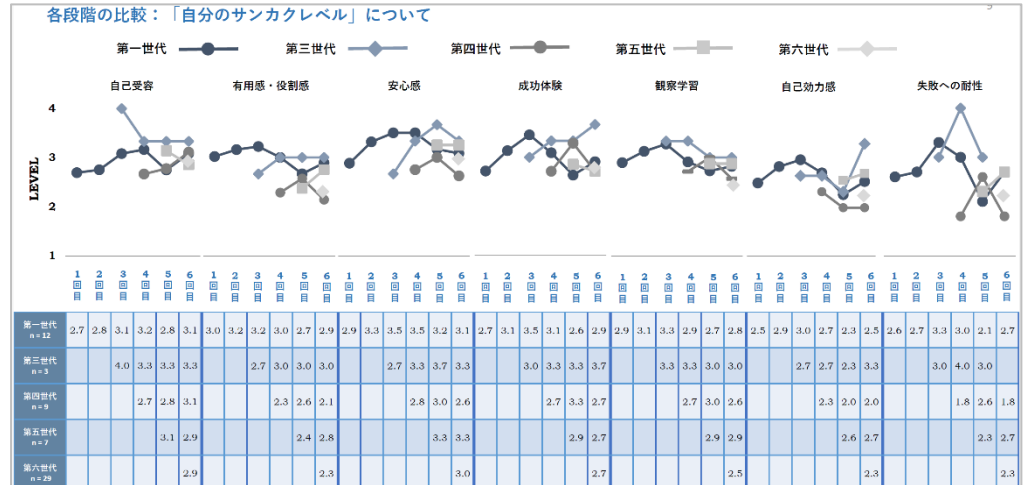
6回目では、継続してデータを取れている若者の数が少なくなったこともあり、数名のスコアの上下が全体に影響しやすくなり、また有意な傾向を示すデータが少なくなりました。

【実施概要】

- 実施期間：2023年9月
- スタッフ10名が、若者60名について他者評定を行った。第一世代12名、第二世代0名、第三世代3名、第四世代9名、第五世代7名、今回初めて回答する第六世代29名である。
- 自己評定は、若者37名が回答した。

【結果サマリ】

- 第一世代のスコアは、低下傾向から持ち直しているように見えるが、回答者が入れ替わりが影響している可能性もある。
- 社会サンカク事業では、社会との接点を増やし、働くことへ挑戦し、生活基盤を整えるチャレンジを図っていくため、失敗したり、落ち込むことも増える。それらがデータに表れていると考えられる。
- 安定して活動へ参加している一部の若者のスコアは、上昇傾向にあり、若者それぞれにストーリーがある



図：他者評定の結果

若者ひとりの変化（若者R）



1回目～3回目のある若者Rの他者評定をグラフにしました。

個人のスコアを可視化することで、その若者の活動への参加状況や状態を把握する手助けになります。

【若者Rの活動】

- オンライン交流から始まり、バイト伴走プログラムやサンカククエストなど、少しずついろいろな人との交流や仕事のスキルアップなどに挑戦しています。

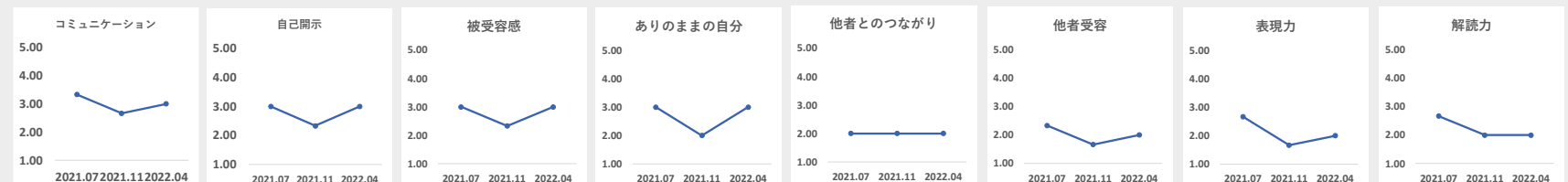
【結果サマリ】

- 《自己認識》については全体的にゆるやかな向上が見られます。《他者との関係性》においては現状維持もしくはやや低下となっています。

自分のサンカクレベルについて



他者とのサンカクレベルについて



若者ひとりの変化（若者S）



1回目～3回目のある若者Sの他者評定をグラフにしました。

上昇している項目もある一方で、低下している項目も多く、葛藤に直面していることが伺えます。

【若者Sの活動】

- オンライン英会話を中心に活動。自己表現や主張が徐々に出るようになっています。

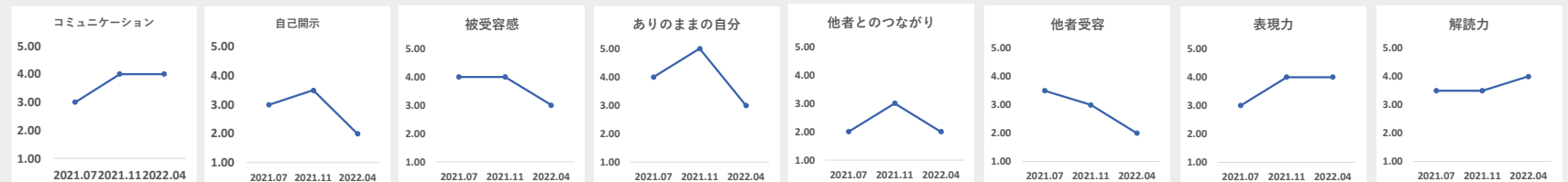
【結果サマリ】

- 「自己受容」「読解力」など上昇傾向の項目がある一方で、現状維持もしくは低下傾向の項目が多く見られます。（一方で、3回の回答者がバラバラなため、その影響の可能性は残る）

自分のサンカクレベルについて



他者とのサンカクレベルについて



特定のプログラムに参加した若者たちの変化（7名3回）



プログラム「ブカツ」に参加した若者のうち、1回目～3回目のデータを取得できている7名について、スコアの推移を確認しました。

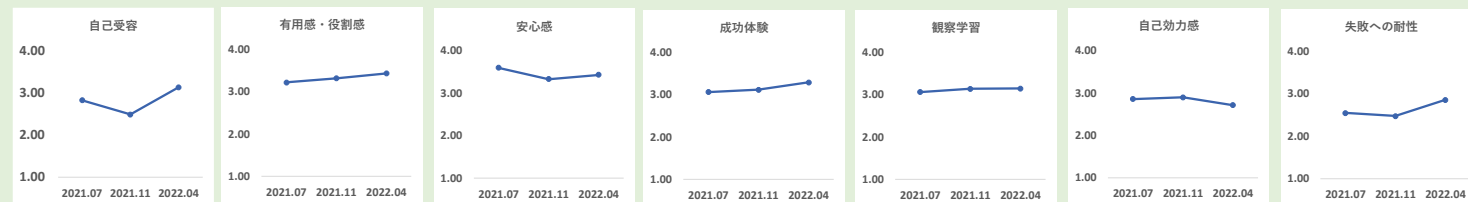
【ブカツの活動内容】

- オンライン交流会
- オンライン英会話
- オンライン居場所

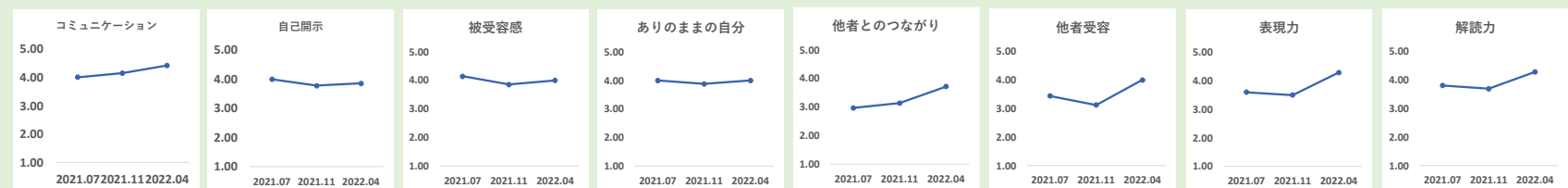
【結果サマリ】

- やや低下した項目として「安心感」「自己効力感」「自己開示」「被需要感」がありますが、7つほどの項目で上昇傾向が見られ、得に他者とのつながりでは上昇傾向が出ています。

自分のサンカクレベルについて



他者とのサンカクレベルについて



特定のプログラムに参加した若者たちの変化（15名2回）

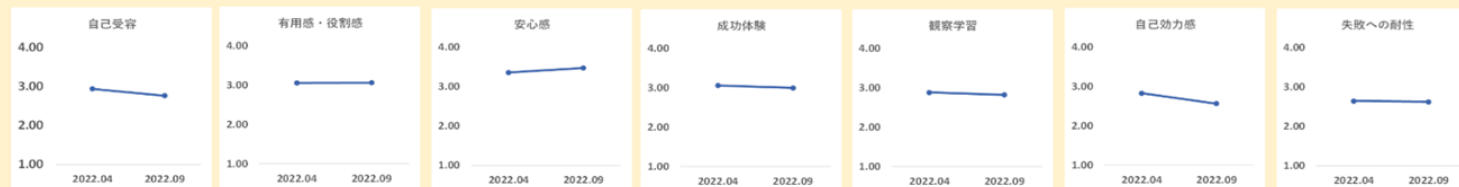


プログラム「サンカククエスト」に参加した若者のうち、3回目（2022年4月）と4回目（2022年9月）のデータが取得できている15名について、スコアの推移を確認しました。

【考察】

- 半年間の推移の結果として、上昇傾向にある若者が数名、前回から下降している若者が数名おり、全体として微減・微増となっています。
- プログラム上、若者が失敗や現実と向き合うことで自己を見つめ直す機会となっており、それがスコアの上下に反映されている可能性があります。
- スコアが高止まりしている項目は、本指標で測れる範囲の限界に達している可能性があります。

自分のサンカクレベルについて



他者とのサンカクレベルについて



スタッフとの結果共有会

各回のアンケート実施後には、報告レポートを団体内で共有し、スタッフの振り返り会を行いました。

①結果に関する報告・共有

- 開発チームより、報告レポートを用いてサンカクレベルの結果を報告
- 若者一人ひとりのスコアや、若者が「自己評定」の自由記述欄に記載したコメントを確認

②サンカクレベルに関する意見交換

- 新しいスタッフへ向けて、サンカクレベルの質問や実施の所感をやり取り
- 指標や事業評価への向き合い方について意見交換
- サンカクレベルの運用・内容に対する改善案の整理

（参考）項目の相関性

実施を重ねる中で、《自己認識》と《他者との関係性》の合計15項目において、項目間の相関性が強いものがあることが分かりました。

類似の性質を重複して測っていることになるため、一つを残して、他を削ることも可能という示唆を得ました。

《自己認識》

- ・ 「有用感・役割感」「安心感」
- ・ 「観察学習」「失敗への耐性」

《他者との関係性》

- ・ 「コミュニケーション」「自己開示」「被受容感」「表現力」「解読力」

相関係数：自分のサンカクレベル

	自己受容	有用感・役割感	安心感	成功体験	観察学習	自己効力感	失敗への耐性
自己受容	1.00	0.55	0.31	0.48	0.61	0.33	0.60
有用感・役割感		1.00	0.76	0.57	0.66	0.68	0.60
安心感			1.00	0.61	0.43	0.67	0.52
成功体験				1.00	0.57	0.67	0.67
観察学習					1.00	0.66	0.71
自己効力感						1.00	0.60
失敗への耐性							1.00

Note: 「有用感・役割感」と「安心感」、「観察学習」と「失敗への耐性」の相関係数が高いため、比較的類似した概念を測定している可能性があります。これらは、いずれか（たとえば「有用感・役割感」と「観察学習」など）を削除しても差し支えありません。

相関係数：他者とのサンカクレベル

	コミュニケーション	自己開示	被受容感	ありのままの自分	他者とのつながり	他者受容	表現力	解読力
コミュニケーション	1.00	0.89	0.86	0.77	0.57	0.78	0.85	0.87
自己開示		1.00	0.89	0.78	0.61	0.74	0.77	0.81
被受容感			1.00	0.82	0.59	0.80	0.84	0.87
ありのままの自分				1.00	0.57	0.68	0.73	0.73
他者とのつながり					1.00	0.57	0.63	0.63
他者受容						1.00	0.88	0.94
表現力							1.00	0.92
解読力								1.00

Note: 「コミュニケーション」と「自己開示」、「被受容感」、「表現力」、「解読力」は相互に高い相関関係を持っており、比較的類似した概念を測定している可能性があります。これらのうちいずれか一つだけ残すという方針でも差し支えありません。



4. サンカクレベルからの学び



サンカクレベルの総括

2023年秋にサンカクレベル3年間の歩みを振り返り、今後へ向けた議論を重ねました。
また12月に自主イベントを開催して知見を共有し、参加者とも意見交換を行いました。

開発チームの 手応え

- サンカクシャが目指す自立の姿が言語化できてきている
- 若者の変化を資金提供者・寄付者へ報告できることは良い
- 団体独自の指標であることは大切
- さらに活動の価値を表現したり、分析できるようになると良い
- スタッフの作業負担が増えることや、指標に翻弄されないように気を付ける

スタッフの 意見

- 回答時に、若者一人ひとりを思い浮かべ、項目に沿って変化を振り返る機会になっている
- 結果を踏まえ、スタッフ間で共有する機会も悪くはない
- 手応えのある若者はスコアが上昇するなど、自分の感触を確認できる
- 表現が学術的で、普段の活動には馴染まない表現が多い

若者の 反応

- 若者に「自己評定」アンケートを依頼することは骨が折れる
- 若者が普段話さないようなことや団体へのフィードバックをコメント欄に記入することもあり、普段と異なるコミュニケーションツールになる

※詳細は、次ページから4ページに渡って記載



[サンカクレベルの改訂へ](#)



(参考) 開発・運用チームの手応え・学び(1)

○サンカクレベルの成果

- サンカクレベルに着手する前に、若者の自立度を測る指標を作ったこともあるが、運用には至らなかった。今回**ループリック型を開発して6回のデータを取得できた**ことには手応えを感じている。
- 団体にとっての“自立の定義”となっており、言語化されたことでクリアになった。「**こういう能力を獲得することで、サンカクシャが目指す自立に近づく**」と言えるようになった。
- 数ヵ月に1度振り返ることで、「確かにこの若者は今この段階にいるな」と確認する機会になっている。

○運用上の学び

- 当初、若者がどのプログラムに参加するのが良いかを判断するアセスメントに、サンカクレベルを活用することを考えていた。現状、スタッフが顔を合わせる機会が多く、またひとりの若者と接点のあるスタッフが複数いるため、「彼はそろそろこのプログラムに参加したらどう

か」というやり取りが自然にできている。サンカクシャの文化として、サンカクレベルの数値よりも若者の状態を見てアセスメントする傾向が強いことから、**アセスメントツールとしては運用しない**ことで良さそう。他団体では、スタッフが数百人いるため、項目を共有することで、何を大切にしたいのか目線を合わせたり、アセスメントに指標を併用することもある。今のサンカクシャのスタッフ人数、若者の人数であれば、増えつつあるが、顔を思い浮かべて話ができる。

- スタッフの活用と合わせて、**多角的に活動を分析できると良い**。若者はどのスコアに何人いるか、どの項目が次のプログラムへ参加するために重要か、上のスコアに達するまで何年かかるか等。
- **ループリックの弱点は、固有の指標であるため、一般的な数値との比較ができないこと**。「サンカクシャに来ている若者はこういう傾向がある」といった評価はできない。

(参考) 開発・運用チームの手応え・学び(2)

○運用上の課題

- 毎回、スタッフの担当者を決め、依頼し、アンケートに回答し、分析し、それを振り返る、という作業に2ヵ月以上かかり、多くの人に依頼して進めていくことが骨折り仕事に感じる。
- 4回目ぐらいまでは、データを分析したり、グラフを描くことで見えてくるものや「何か言える」感があったが、5回目頃から、何をどう分析して活動に活かすのが良いか見えなくなってきた。
- 全部で15項目あるため、開発チームも項目が覚えられておらず、扱いきれしていない。言葉が学術的で難しく、スタッフに親しんで使えてもらえていない。

○事業評価について

- 指標やルーブリックを用いた事業評価は、助成団体から**好反応を得ることが多い**が、事業評価を行っていることが助成を得ることに貢献しているかは分からない。

- **事業評価にスタッフが翻弄されることは望ましくない**。現場のスタッフが若者に向き合える環境を保ちながら、**資金を提供してくれている方々に、若者の変化を報告していくことは続けたい**。
- 助成事業毎に指標を設けているが、若者にとっては助成事業で何かが区切れるわけではないので、**団体独自の指標を持って一貫したデータを得ておくことは大切だ**と考える。
- “**ルーブリックの項目に焦点を当てて若者を観る**”ということが大切で、**スコア自体はそれほど意識しなくても良い**。事業評価の結果ではなく、プロセスに意味がある。

(参考) スタッフの意見・感想

○アンケート回答について

- スタッフが「他者評定」アンケートに回答する時に、**ひとりの若者を思い浮かべて、その若者の変化を振り返ることができている。**
- スタッフ一人につき多くて20名ほどの若者について回答する。時間はかかるが大変なほどではない。
- 接点の少ない若者の場合、情報が少なく回答に迷うことはある。スタッフが若者のある一側面だけを見て回答することにはなる。スタッフ毎に見せる顔も違うし、サンカクシャ以外の場での生活もある。**全てを理解した回答ではない。**
- 特に新規の若者は数回会った状態で回答するので、何が見えていないか、どの情報によってどのような印象を持っているのか、**自覚的になる。**

○結果の振り返りについて

- 例えば、若者「自己評定」において「自己肯定感」スコアが上がった際に、どんな出来事があったのかを考える機会になる。
- アンケート回答をきっかけに、若者について振

り返って共有する場があるのは良い。

- 波はあるが、その瞬間に本人が思っていることを可視化することはできている。
- 見立てとサンカクレベルが一致している場合は、**自分の判断を裏付けされたように感じる。**
- サンカクシャに来ている若者やサンカクシャとの相性がいい若者は、スコアが順当に上がっていく。3回ほど**データを取ると上昇傾向がみられることが多い。**

○課題と改善案について

- サンカクレベルや結果を、もう少し活動に活用したい。**現在はスタッフにとって有用なものとは言い難い。**
- サンカクレベルの言葉は普段使う言葉とかけ離れていて難しく感じる。スタッフが**使いやすい言葉に調整**していく方が良い。
- サンカクレベルの表現を各プログラムの段階と合わせることで、次のプログラムへ参加できそうか、プログラムに参加して獲得してほしいもの等が明確になるのでは。



(参考) 若者の反応

○スタッフからヒアリングした若者の反応

- アンケート全般に言えることだが、若者に「自己評定」アンケートを依頼することは骨が折れる。何度か声をかけないと回答してくれない。
- 若者が団体へフィードバックを伝える機会はなかなかないし、対面だと言いつらいこともあるかもしれないので、それ以外のコミュニケーションツールが確保されていることは良い。

- 若者が自由記述欄に記載するコメントが興味深い。自由記述欄だけだったら出てこないコメントを、アンケート内容を踏まえて自己を振り返りながら書いてくれている。普段話さないようなことやスタッフへの感謝を記す若者もあり、普段のコミュニケーションとは異なる若者の声を聞く機会になっている。

○若者の自由記述（フォームより抜粋）

【1.この数ヶ月で、ご自身について気付いたことがあれば書いてください】

- 「前は自分を脅して言うことを聞かせてる感覚だったけど、肩組めるぐらいにはなりました」
- 「やる気はあるけど長続きしなかったりつまずいたら嫌になる事がある」
- 「自分は思っていたよりも、なにもできない」

【2.この数ヶ月で、ご自身と周囲の人との関りについて、気付いたことがあれば書いてください】

- 「サンカクシャ繋がりで来客した方と自然と会話ができるようになっていた」

- 「自分が大人になれてないからか、自分は年上の人の方が接しやすいと思った」
- 「話しかけてもらえると関係性を築けるが、自分からは難しい」

【3.その他コメントがありましたら書いてください】

- 「バイト頑張る」
- 「人生考えることが多すぎてめんどくさい。命を断りたい訳では無いが、世の中を上手く過ごせようになりたい」
- 「行けてないけど、なんかあったらキチ行けばいいって思うとちょっと心が軽くなる気がします」

第1回イベント開催：2022年3月19日

知見の共有として、サンカクレベルの開発経緯と内容を報告しました。
若者支援のNPOや中間支援組織の方など、60名を越える参加がありました。

実践報告会

若者支援、"自立"はどう測るべき？
～今年度開発した「自立の指標」を事例に、
評価の良し悪しを考える～

2022.03.19 [SAT] 16:00-17:30

Zoomにてオンライン配信 | 要予約
参加無料 | 主催 NPO法人サンカクシャ

DataCast 代表
池田利基

サンカクシャ代表理事
荒井佑介

ソーシャルフリーランス
土岐三輪

【参加者の感想（アンケート結果より抜粋）】

- 「評価を行ううえで、子ども若者が求めるもの、現場の求めるもの、社会が求めるものの擦り合わせが必要なんだと感じました。そして評価することや、評価を上げることが目的とせず、評価から活動を振り返り改善していくことまでがセットでなければならぬと感じました。」
- 「指標の数値を上げるようなことを目的となっはいけない、エピソードのような定性的なものの方が大事だと思いました。」
- 「指標とその行間の意味の発信、困難さを開示していくこと、具体的に変化の指標がみれて、色々と勉強になりました。」
- 「指標は若者の評価として優劣つけるものでなく、若者の状態を把握するためのもの。重きを置きすぎないということを、代表の荒井さんが折々に言い続けることや、若者の意向を尊重するということは、とても共感し、他の若者支援NPOにも共感されて広がって欲しいと思いました。」

第2回イベント開催：2023年12月15日

サンカクレベルの3年間の実施結果、軌跡、スタッフ・関係者の意見・感想を報告しました。第1回目と同じく若者支援のNPOや中間支援組織などから60名を越える参加がありました。

【実践報告&座談会】

NPOの事業評価はどうあるべき？

～「若者の自立」を測ってきたサンカクシャと
資金提供者が思うところを話します！～



2023年12月15日(金)
20:00-21:30
zoom開催 | 要申込 | 参加無料
主催 NPO法人サンカクシャ

ベネッセこども基金
事務局長
青木智宏さん

DataCast 代表
池田利基さん

ソーシャルフリーランス
土岐三輪さん

サンカクシャ代表
荒井佑介

【参加者の感想（アンケート結果より抜粋）】

- 「団体として果敢に評価に向き合われていること、一方で評価の在り方や価値について、「現場をゆがめない形で」使うにはどうしたらよいかと模索されているところ、率直なフィードバックも含めて非常に勉強になり、考えさせられました。」
- 「子どもや若者の調査や測ること。どんなに配慮しても暴力性が伴うことの怖さを私自身感じています。NPO側がもっと横のつながりをもってその姿勢を行政や財団に伝える必要があるように思います。参考にさせていただきたいと思いました。」
- 「『独自の評価をつくったことで、〇〇ができるようになった』という結論ありきの話とっていたのですが、実際に運用していたうえでの課題や、本当に価値があるのか？という正直な話を伺うことができたことが、大変為になりました。」
- 「指標があるのは組織の方向性を共有するのにいいが、数字を追うことが目標になってはいけない。現場で丁寧に若者とかかわっていることと乖離しないような活用に、とても共感しました。」
- 「「実験」という言葉に共感しますし、実験を重ねることの価値はとても大きいと思いました。」



5. 今後へ向けて



若者を支援する5つのステップ

2023年にサンカクシャの複数のプログラムを5つのステップに整理

若者が安心して生き抜いていける社会をつくる



今後の方針

フェーズIIへ向けて、サンカクレベルを改訂します。

■大きなポイント

支援の5つの
ステップに合わせて
レベルを設ける

普段使いの言葉
を用いて
活動に沿う

項目を絞り
目指す“自立”を
端的に表わす

■小さなポイント

- スタッフと若者の負担軽減を目指し、若者への一斉送信など、可能な改善を続ける。
- データの活用に向けて、スタッフが閲覧・出力しやすいデータ保管を検討し、プロジェクト単位の分析に活かす。
- 引き続き各回毎にスタッフの振り返りの場を設け、生きた仕組みであり続ける。
- ソーシャルセクターにおける知見や学びの共有として、イベント開催や勉強会の機会を積極的に作る。

引き続き、サンカクシャの試みを見守っていただけましたら幸いです。

■ サンカクレベル開発チーム

池田利基

任意団体DataCast代表

サンカクレベルの開発・データ分析・本レポートの監修を担当

土岐三輪

ソーシャルフリーランス／一般社団法人インパクト・マネジメント・ラボ 共同代表

サンカクレベルの開発伴走・運用伴走・本レポートの制作を担当

荒井佑介

NPO法人サンカクシャ代表理事

サンカクレベルの方針提示・運用主導・本レポートの制作責任者

